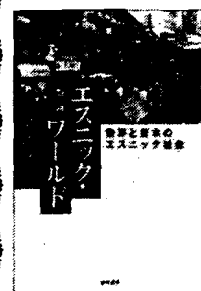


エスニック・ワールド

世界と日本のエスニック社会

山下清海編著



四六判 264頁
 定価 2310円
 2008年発行
 明石書店
 03-5818-1171
 ISBN4-7722-7503-2758-1

神奈川県で高校時代を過ごした評者にとって、横浜中華

街は友人と遊びに行く場所であった。しかし大学でエスニシティに関する授業を受け、関心をもつようになる、中華街がエスニックタウンの1つであることを認識できるようになり、東京近郊でエスニックタウンを経験することが容易であることがわかるようになった。さらに中国人、韓国人、そして日系ブラジル人の留学生と友人になり、彼女たちの経験や日本における状況について語る機会が増え、エスニシティ問題は身近な存在となり、検討すべき課題であることが体感できるようになった。

本書では、エスニック集団を「一つのより大きな社会、特に近・現代の国民社会の枠組みの中のより小さな（下位の）集団、ほかと区別できる何らかの民族的特色を持った住民集団」（13頁）であると定義している。こうした集団は、主流社会とは異なる独自性をもつ存在と位置づけられ

うるものの、権力関係において下位におかれることにより、権利獲得は、今なお困難な課題となっている。エスニック社会が多様な様相を見せながらも、権力関係が機能している様態とその相違を、容易に比較できることが本書の特徴であろう。

具体的には、18人の研究者によりエスニック社会が幅広く紹介されている。第1章では、エスニック社会の基礎として問題に対する研究の視点が提示される。第2章ではカナダ・ドイツ・オーストラリアなどさまざまな国におけるエスニック社会について、第3章では日本におけるエスニック社会について述べられる。地理的・歴史的背景が語られ、現状と課題が提示される。本文に加え、著者がそれぞれ自由な感覚で書いているコラム欄が面白い。具体的な事例から特別なトピックまで、著者の顔が見える文章が続く。エスニシティの問題は、宗教的にも政治的にも制約を受け調査に困難をきたす可能性がある。そのなかで本書は、各調査者の調査経験に基づき、生きた社会の記述となっている。具体的な事例を読んだ後で、改めて第1章を読むことで理解は深まる。各節は短いものであるが、参考文献が好奇心をさらに深める手助けとなっている。

（影山穂波・相山女子学園大学）